

ハンターとともに走る

いげや かずのぶ
池谷 和信

民博 人類文明誌研究部



猟に同行してみました

カラハリ砂漠の狩猟キャンプでの筆者（左側）。右上にぶら下がっているのは、しとめた獲物から作った干し肉

獲物を獲得する知恵や技術を求めて世界中を飛びまわる筆者。ページ背景の地図にあるように、なんと三大陸をまたいでハンターに同行し、狩猟文化、生き物の生態を探ってきた。しかし猟のノウハウを学ぶのは一筋縄ではいかない。ハンターには何が必要とされているのだろうか。



クマの冬眠穴に入る筆者（足だけ見えている）



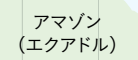
東北地方
(日本)

く、草むらでは半分も残っていないなかったり、翌日ともなれば風で消えつつあったりするからである。それでも、彼らは獲物を探すために文字を読み取ってきた。しかし、大型動物の場合には文字よりも目視の方が頼りになっており、前方数十メートルのところに獲物を見つけて猟を始めることが多かった。

あるとき、弓矢猟に同行したことがあった。当初、ハンターはシャツを着ていたが、途中で動物が見えると服をぬいで腰をかかめて急ぎ足になった。わたしはそのあとを追跡したが、動物の近くで音を出してしまい獲物が逃げてしまった。弓矢猟は単独でおこなう猟であることを痛感した。このように猟のじやまになったことは数えきれないが、役に立ったことは一度もないであろう。

獲物の出現

東北日本のクマ狩りではハンターは〇名ほどで猟に出るが、急峻な山地のなかということもあってクマを探す場所はほぼ決まっていた。春先の雪解けが早い急斜面は、冬眠から目覚めたクマが餌を探しにくることが多いため、ハンターは双眼鏡を使って入念に見張っていた。一日中ほとんど休憩のないカラハリの猟とは違って、ハンターは急斜面を登ると二斉に



アマゾン
(エクアドル)

アマゾンの吹き矢猟



わたしは、これまでに多くのハンターとともに野山を歩いてきた。

世界最大域の熱帯林を有するアマゾンの森からアフリカのカラハリ砂漠の大地、そして東北日本のブナの森など、それぞれ自然環境は異なるが、ハンターとともに歩くことをフィールドワークの基本としてきた。ときにはハンターの足手まといになっているだけではないかと思うこともあるが、ともに歩くことで見えてくるものがあると信じてきた。

わたしは、なかでもカラハリ砂漠に暮らすサンのハンターとともに歩くことが多い。サンは、世界的にも狩猟民の典型といわれる人びとである。当然ではあるが、当初、わたしが行きたいと繰り返し言っても、なかなか猟への同行を許してもらえなかった。同じキャンプに暮らしていてもハンターはわたしが不在にしているあいだにそと出て行ってしまっただ。

動物の形跡

一カ月後にいよいよ猟への同行を許されたのであるが、畏れ多いながらも獲物がかかっているかどうかを確認するだけなので、猟の方法も成果もわかりやすいものの、犬の助けを借りる槍猟ではただひたすら歩くだけに見えた。まずは動物を探しに行くのである。カラハリ砂漠は灌木と草地からなるサバンナが占めており、比較的に見晴らしはよいが、そう簡単に動物を目視できるわけではない。それゆえ、ハンターは動物の足跡をよく見ていた。その形は、それがライオンであるとか、いつごろ移

座ってクマを探するため、同行したわたしもその場で休むことができた。

アマゾンの森では猟の対象が新世界ザルであるので、高さ三〇メートルある樹木の上部を見ることにつながる。長さ三メートルもある吹き矢を背中にかついで森を歩き、猟場らしきところに着くと常に上を向いているので首が痛くなるが、ハンターは慣れたものである。木の葉を笛のようにしてウーリーモンキーを呼ぶ音を発していたのが印象深い。

そして追跡

このようにハンターとともに歩くことをとおして、動物の行動や生態によって獲物に接近する方法が異なることがわかってきた。しかし、いずれも共通するのは、じつは、接近後にハンターとともに走る必要があるということだ。カラハリ砂漠では、犬の助けを借りて獲物を立ち止まらせ、そこへ槍を投げておいて走って追いかける。アマゾンでは、吹き矢をもってサルの群れの移動とともに地上を走る。日本では、クマを銃で撃ったあとに獲物を追いかける。結局のところ、歩くだけでは動物を獲得できない。どのような場所でも走れないと、ハンターにはなれないと痛感している。

犬の助けを借りた槍猟(左)と弓矢猟(右)



カラハリ砂漠
(ボツワナ)